令和元年度 第４回 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】令和元年 11 月 13 日（水）
午後１時 30 分～３時 30 分
【会場】磐田市文化振興センター
２階大会議室

１　出席者

・　発言者　磐田市において様々な分野で活躍中の方
　６名（男性３名、女性３名）
・　傍聴者　160 人

２　発言意見

番号	分野・所属	項　　目	頁
発言者１	製造業	高齢者及び障害者の積極的な雇用	3
2	製造業・商業	手作りジャムの製造・販売	6
3	福祉・ 地域振興	高齢者、子育て世代の女性等が集うカフェの経営	11
4	多文化共生・ 防災	外国人のための防災活動の展開	13
5	教育	小学校高学年を対象にした職業体験の開催	17
6	スポーツ	小学生、中学生等に対するラグビーの指導	23
傍聴者１	－	県の別組織で実施している類似した事業	30

【川勝知事】　こんにちは。この広聴会にお越しいただき誠にありがとうございます。昨日から移動知事室をやっておりまして、知事に就任して10年を超えましたが、3000回近くあちらこちらへ行って、現場の人々の声を聞くという活動をしています。現在、西部全体の最高統括官といいますか、意思決定者の１人、西部地域局長の席が私の席になっています。といっても、座っているわけではなく、昨日からあちこち回っています。今、磐田は大変注目されておりまして、磐田で一泊し、皆さんのお声を聞きたいということで、やって来たわけでございます。来年の春でしょうか、御厨駅が開業するということで、人の動きも変わってくるのではないかと思います。袋井のエコパでラグビーワールドカップが大成功し、「シズオカ・ショック」という名前とともに、世界に、富士山と併せて静岡の名前が轟き渡ることになりました。今、磐田で、運動に関わるクラブを、市長さんのリーダーシップのもとに運営していただいておりますけれども、静岡産業大学には、トランポリンでオリンピック選手に選ばれる可能性が高い方がいらっしゃったりいたします。サッカーもラグビーも盛んです。スポーツと健康、これはイメージとしてぶれてはいません。昨日は、磐田の土地に魅せられ、サラリーマンを辞めてアスパラやブルーベリーを栽培している青年にお目にかかって来ました。また、先ほどは静岡産業大学に行って来ました。この磐田の、令和の時代における新しい飛躍を感じさせる昨日今日でした。

今日は、ここに、磐田を代表するそれぞれの分野で活躍されてる６人の方がいらっしゃいます。この方達のお話を、今日は広聴ですから、広く聴くということで、お話を承ります。ただ、「聴きっぱなし」というふうに思われるところもあります。「聴きっぱなし」ではありません。何しろ、今日は、いわば県の中枢部がここに移動しているわけです。ここでお聞きしたことですぐできることは、実際にここで決められます。ただ、すぐに決められないこともあります。そうしたことは持ち帰りまして、必ず、「その件についてはこうしました」というふうにお返事を差し上げます。「聴きっぱなし」ではなく、課題を持ち帰る、あるいは、この場でこうしましょうと決めます。そうした生きた広聴会ということでございます。２時間弱でございますけれども、ぜひ、これが実のあるものになりますように、そして、今日御出席していただいた方々、最後まで、何卒よろしくお願い申し上げまして、冒頭の挨拶といたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【発言者１】　皆さんこんにちは。コーケン工業の発言者１といいます。よろしくお願いします。

まず、自己紹介ですけれども、旧竜洋町飛平松でパイプ加工をしているコーケン工業といいます。約 300 人の従業員さん、パートさんとか、みなさん含めて 300 人のメンバーで、パイプ加工、ものづくりを通して「チームコーケンの幸せ」ということを目的に頑張っている会社です。ものづくりは、パイプ加工という専門の話になりますので、その話はさておいて、会社の特徴を紹介したいと思います。うちの会社は、約 300 名のメンバーで頑張っています。一番若い子は、今年の４月に高校を卒業して入社した子ですから 18 歳。誕生日を迎えて 19 歳かな。18 歳、19 歳の子が一番若いです。一番最高齢の社員を、我々の会社では、「じいじ」、「ばあば」と呼んでいるんですが、いちばん上の社員は何歳だと思いますか。今年の５月に誕生日を迎えまして、91 歳の方が元気に働いてくれています。うちは８時間稼働ですが、彼は、８時間しっかり元気に働いてくれています。彼は、それまでは自営で商売をやっておられたのですが、69 歳か 70 歳の時にそれをたたんで、のんびりしようと思ったようなんですけれども、やっぱり働いてる方が体調が良いということで、72 歳の時に仕事を求めたようなんです。70 歳過ぎの履歴書を持って行って雇い入れてくれる会社は普通はありません。たまたま縁がありまして、うちの会社に入社することになりました。そして、今 91 歳を迎えました。立ち仕事をしているんですけれども、彼は、元気だからそれができるのか、仕事してるから元気なのか、これは僕には分かりません。両方だと思いますが。そんな形で、91 歳の「じいじ」が最高齢で働いております。一昨年、「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞中小企業庁長官賞というものをいただきました。これは、私が貰ったわけではなくて、うちの従業員さんみんなが長い時間をかけて評価していただいて、いただけた賞だと本当に思っております。高齢者雇用、障害者雇用というところを注目していただいたわけなんですけれども。従業員約 300 名の中に、60 歳以上の方が約３分の１います。約 90 名です。90 歳代は 1 人です。80 歳代は 4 人。70 歳代が約 40 名。60 歳代が、私も含めまして、約 40 名。大体 90 名くらいになると思いますが。そんなメンバーで頑張っております。そうは言っても、若者が一生懸命頑張ってくれている会社です。20 代、30 代が 40%ちょっとですから、若者も頑張ってくれています。

60 歳以上で高齢者と言うと、この中からも批判をくださるような人が多分いっぱい

ると思いますし、私も、62 歳になるんですが、高齢者の仲間にまだ入れて欲しくないなと思ったりするわけなんですけれども、60 歳以上の人がそうやって元気に働いてくれている会社です。中小企業庁長官賞をいただいてから、いろんなお客様が工場見学に来てくれるようになりました。テレビとか、雑誌とか、新聞とか、いろんな所から取材を受けるようになって、その 91 歳の「じいじ」は、プロのカメラマンに、顔から 50 センチくらいの所から大きなカメラを向けられても、場慣れしてきました。初めの頃はちょっと引きつっていたんですけれど、そのうちだんだん慣れてきましてね。本当に笑顔のいい写真が撮れるようになってきたんです。そんなふうに、いろんなお客様が来てくれるようになりました。お客様から見られるのは、プレッシャーがものすごくあります。けれども、その反面、人に見られると、楽しいとか張り合いがあるというふうになると思います。

今日は、知事じゃなくて「平太さん」と語ろうということですので、先ほど、平太さんと話をしている中で「現場主義だよ」という話をいろいろ聞きました。そういう現場をみんなに見てもらいたいということをお願いしようかなと今日は思っています。いろんなお客さんが来てくれました。その人達は、商売上のお客様ではなく、従業員が元気に働いている会社の助言をいただきたいということで来てくれたんです。僕はほとんど受け入れましたが、約 300 名ぐらいのお客様が来てくれました。いろんなお客様が来てくれました。いろんな人を迎えたんですけれども、「明日、お客様が 30 人来るよ」というと、「職場を綺麗にして迎えないといけない」という気持ちになります。「職場を綺麗に」というのは、どうしてもトーンが下がる時があるんですけれども、「お客様が来てくれる」、「誰かに見られる」、こういうふうに思うと、少しずつでも綺麗にしておかなければいけないと気持ちが向上すると思います。そういう意味で、私は、言葉は悪いかもしれませんが、お客様を利用させていただいて、「明日はこういうお客様が来るから、みんな、職場を綺麗にしておいてね」と前日に言います。こんなエピソードがあります。ある「ばあば」の話ですが、半分冗談なんですけれど、「ばあば、今日、口紅の色が違わないか」と言うと、「だって、今日、お客さんが来るもの」という答えが返ってきました。お客様が来るとなると、やっぱり自分の身なりにも多少気を使うんです。これが健康でいる一つの理由というか、人に見られるとなると、意識が改善・向上して、良い方向に行くんじゃないかなと思っています。また、こんなエピソードがあります。ある 80 歳を超した「ばあば」の話です。雑誌の取材がありまし

た。「私、恥ずかしいから写真はいやだ。絶対いやだ」と言って、どうしても譲らないものですから、「じゃあ、俺といっしょに写るか」ということで、２人でツーショットの写真を撮りました。やっと納得して写真を撮ったんですね。で、その雑誌が出来たので、彼女に渡しました。彼女は、お孫さんが６名いるんですが、お孫さんに見せたところ、お孫さんに、「ばあば、すごいじゃん。雑誌に載ったじゃん」と言われて、「元気にまた頑張ろう」という気持ちになったというような話も聞きました。このように現場で働いている一人一人が元気にならなければ、会社は発展しないんじゃないかなと思います。「人」が元気な会社を作ってくれると信じています。

この磐田市も、今、人口減です。磐田市の人口が増えるよう努力しなければいけないと思ってます。私ができるのは、企業人ですから、会社としてそういう活動をして、いろんな人たちに磐田に来て欲しい。まず、いちばん最初にできることは何かということで、磐田で生まれ育って、東京、名古屋、大阪などいろんな所の学校へ行って勉強をし、また、この磐田に戻ってきて欲しいということで、私も、高校、大学に足を運んで、先生と話をしています。産業大学へ行って、授業みたいなことをやってみたりとか、いろんなことをするんですけれども。そういうことで、とにかく人が増えなければ、やっぱり元気にはならない。やり方は、いろんなやり方があると思います。一人一人が元気になって欲しいと思います。そのために、今日ぜひ知事にお願いしたいのは、現場に行って欲しいということです。一人一人が元気にならなければいけません。今日のように、みんなで話をしてくれることも良いことですけれども、やっぱり現場に行って、例えば「じいじ」１人に、「元気で頑張っているかい」とただ一言だけでもかけていただければ、彼らはまた頑張ってくれて、100 歳まで元気に頑張ってくれるんじゃないかなと感じております。今年は災害がいろいろありました。ニュースでいろんなことを聞きました。どのニュースを聞いていても、現地へ来て声をかけてくれるといちばん元気が出るという話が聞こえてきたと思います。災害に遭われた方は本当に不幸なんですけれども、そこへ来て別に何もしなくても、声をかけてくれただけでも、嬉しいとか、元気が出たというニュースをいっぱい見ました。今日、知事を始め、磐田市の皆さんやいろんな人達がいますけれども、事務仕事も忙しいでしょうけれども、現場に行って、皆さんのところに立っていただき「元気で頑張って」ということを、今まで以上にやっていただけたら、この磐田市はもっと元気になるんじゃないかなと思います。もっともっとみんなで現場に行くようお願いしたい。知事、

よろしくお願いいたします。

【発言者２】　御紹介いただきました、「さじかげん」の発言者２と申します。

このようにたくさんの方に集まっていただき、ありがとうございます。なかなかこういう機会がないのでかなり緊張していますが、どうぞよろしくお願いいたします。私は埼玉県の出身でして、上の子の就学をきっかけに、Ｉターンをいたしました。現在、子どもは６年生と４年生の男の子２人で、市内のミニバスチームに所属して頑張っています。そんなごく普通の二児の母です。この間、ジュビロマラソンが開催されまして、２人とも参加させていただいたんですが、市内、男子の部でお兄ちゃんが３位を取りました。広島の訪問にも御一緒させていただいたりして、磐田市に引っ越してきて良かったなと思っています。

先ほどのコーケン工業さんと大分毛色が違うお話をさせていただくことになるんですが、私の仕事の話を中心に、お話させていただければと思っています。ここで、皆さんにお話させていただきたいことがあるんです。仕事をするスタイルについて、私は２つのタイプがあると思っています。１つは、目標を立てて、その目標に向かっていくタイプと、あともう１つは、目の前にあることに真剣に取り組んでいくうちに扉が開いていくタイプ。私自身、「さじかげん」は後者のタイプだなと思っておりまして、そんなジャム屋の「さじかげん」の話を今しばらくおつき合いいただけたらなと思います。

静岡に来たのが６年前でして、私の主人の実家がクラウンメロンの生産農家をしております。私自身は、農業の経験全くなしで、こちらに帰ってきました。そんな中で、主人の実家のメロンを利用し、農業の６次化を目指してジャムづくりをしていったらどうか、そういった形で家の役に立てるのではないかということで始めたのがジャムづくりのきっかけです。ただ、メロンなんですけれども、もしかしたら、この中にも生産をしている方がいらっしゃるかもしれないんですが、蜜加工に大変向かない食材です。ジャムとして、現時点で納得いくレシピがまだ完成していない状況です。もしかしたら、そういうことを今後開発していくというのも、静岡の新しい形になるかもしれませんね。静岡県は、農産物の生産品目が、日本で一番多いんですね。温暖な気候ということもありまして、果物の生産農家さんも大変多くいらっしゃいます。そんな中、主人が磐田農高から東京農大と農業関係の所にずっと進学していった関係で、

同世代の友人で非常に良い物を作っている生産農家さんが自分の周りに多くいたということもあり、果物の魅力をジャムという加工品に形を変えて、お客様にお届けできるとか、今まで農家さんが、形が悪いだけで味はおいしんですけれども、お金を出して処分をしてしまっていた物を、形を変えてお客様にお届けできるという、ジャムの商品としての魅力や可能性を感じて、ジャムづくりにすごく引き寄せられて、今日まで至ってる状況です。一農家の嫁としてこれをやっていきたいなと思ったところからジャムづくりがスタートしていたという状況です。

ジャム加工につきまして、その施設、設備といった大きな先行投資がない状況で、自分自身始められたのもとてもありがたかったんですが、自宅のキッチンから始めた本当に小さいビジネスです。その当時、子どもがまだ小さくて、自分の経験も浅くて、自分のできる範囲、精一杯のことを無理なくやって来れたので、今、ここまで続けて来れたのかなというふうに思っています。現在も、無店舗の経営スタイルで、工房自体は、自宅ではなくて、法多山の門前にありますカフェの厨房を工房としてお借りしまして、ジャムの製造をさせてもらっています。

そんな中で、始めたばかりの頃なんですけれども、月１回の農業市に毎月出店させてもらって販売をするという、本当に小さい流れから始めました。その流れを崩さずに続けてきたような状況です。本当に始めてすぐの頃は、寝る間も惜しんで、レシピをとにかく開発しまくっていたんですけれども、ジャムを煮ることがとにかく楽しくて仕方なくて。今でも、農家さんが心を込めて作ってくださった果物、いわゆる傷があるような物になるんですけれども、そういったものをジャムに加工することがすごく楽しくて幸せだなと思いながら、仕事をやらせてもらっています。現在、私の仕事としては、ジャムの自社製品を企画製造したり、イベントに出店させてもらい、作った物を販売しています。あと、パン屋さんや雑貨屋さんに卸させていただいたり、農家さんから農産品を持ち込んでいただいて、例えば、それがいちごだったり、みかんだったりするんですけれども、そういった物を、自分の所では加工できないということで、受託加工なども承っています。B 品と言うか、傷物が出る時期というのは、農家さんは本当に忙しくて、とてもじゃないけど加工品なんて作っている暇はないんです。物は本当にいっぱいあって、捨てるのはもったいないくらいなんです。もったいないくらいおいしい物があるんですけれども、商品として流通できないので捨てざるを得ない。お客様の口に届いてもいいような物で捨てられてしまっている物をこちら

がお預かりして、お客様に届くように加工するという仕事をやらせていただいた時に、すごく農家さんに喜んでいただきました。今までゴミとして廃棄してしまっていたおいしい物を、お客様に届けることができてとても嬉しいと喜んでいただけたので、「メロンの農家の嫁」としてはあまり役に立っていないんですけれども、大枠で「農家の嫁」と考えた場合に、少しは役に立てているのかなと嬉しく思って、仕事をやらせてもらっています。本当に小さい顔の見える範囲でのビジネスをやらせてもらっています。

現在、磐田市の産業政策課さんや静岡県のよろず支援から繋がった仕事が多くて、とてもお世話になっています。幾つか御紹介させていただくと、磐田市内の農業関係の企業とパプリカジャムの開発製造をさせていただいています。こちらのパプリカジャムなんですが、初めていただいた御依頼だったんですけれども、とても御好評をいただいておりまして、豊岡地区でも取り扱っていただいています。もしよろしければ、御覧いただけたら嬉しいなと思います。それから、先日、文化祭がありました磐田農業高校の生産流通科の生徒さんと、イチゴジャムの共同企画開発もやらせていただいてます。あとは、木工業の会社とピアノの木の端材を利用したスプーンの企画・開発をさせていただいてまして、いろいろな御縁をいただきながら、仕事をさせていただいております。自分の仕事のスタンスとしては、仕事の価値は対価じゃなくて、自分がどういった経験ができるかがすごく大事だと考えていて、まずは、断らないでやれるようにするにはどのようにしたらいいかとか、どういうふうにやれば折り合いを付けていけるかということを大切にしながら仕事をやらせていただいています。何よりも、自分の心が動くかどうかということをすごく大事にして、仕事をさせてもらっています。

今後の展開についてですが、一番最初にお話させていただいたように、私は、いろいろ自分の目の前にあることに取り組んでいくうちに扉が開くタイプだと思っていまして、まだ、ちょっと真っ白だなというふうに思っています。今、与えてもらえておりますこの状況で一生懸命取り組んでいくうちに、また、きっと新しい展開が、扉が開かれてくるんじゃないかなと思っています。私自身、これから「さじかげん」がどんなふうに育っていくか楽しみです。今日、「平太さんと語ろう」という会なので、農家の嫁の一人として一つ言えるのは、静岡県は農産物がすごく多いんですけれども、お土産屋さんに行った時に、例えば、北海道とかだと、物産市に行くと、すごく有名

な農産物とかジャムなどの加工品が多いと思うんですけれども、静岡県を代表する土産物がなかなかないと思っています。「うなぎパイ」とかお茶はあるかなとは思うんですが。余剰の物を生かす加工技術を高めていくと、また、一つの道が切り開けていくのではないかなと思っております。私自身は、「声」とか「出会い」を大事にして、自分のできる範囲をしっかり見定めながら、ゆっくりコツコツ、自分のサイズで、おいしいジャムを皆さんに届けて、これからも仕事を継続していきたいと考えております。取り留めのない話になりましたが以上になります。御清聴ありがとうございました。

【川勝知事】　発言者１さんの所は、これからの日本の働き方のモデルになるんじゃないかと思います。90 歳の方が、仕事をしながら元気、元気だから仕事ができるというのは、これは相乗効果で、好循環ができている。80 代の人、70 代の人、60 代の人で、90 人もいらっしゃるということですね。私も 70 を超えておりますので。天皇陛下が譲位された時おいくつだったでしょうか。1933 年、昭和８年のお生まれで、去年 2018 年に 85 歳になられ、この４月 30 日をもって、余力を残して譲位されたんです。だから、85 歳と４ヶ月余りまで現役でいらしたということですね。国民の統合の象徴です。憲法にそう書かれていますね。「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く。」、これが第１章第１条の憲法の条文ですけれども、85 歳と４ヶ月まで仕事をされています。新天皇は、５月１日に即位され、10 月 22 日に即位礼正殿の儀を済ませられ、明日、あさってと大嘗祭がございまして、来年幾つになられるんでしょうか。1960 年、昭和 35 年のお生まれですから、来年の２月 23 日、富士山の日に満 60 歳になられます。そこから仕事です。ですから、発言者１さんのやり方が正しいんです。91 歳はさすがにですね。陛下も余力を残されているとは言え、全身全霊をもってこの仕事に取り組むには、体力の衰えを感じているということで､位を譲られたんですけれども｡80 代の後半からは、個人差が出てくるということでしょう。国民の統合の象徴が 60 歳から本格的な仕事、また 85 歳と４ヶ月まで仕事されたということですね。そういうのに、ちょうど合っているのが、発言者１さんの所じゃないかと思います。今は平均寿命が延びました。日本は世界トップクラスです。健康寿命は女性が 76 歳、「健康寿命」というのは、年を取っても、日常生活に支障をきたさない年齢。これは世界トップクラスですから。仕事をしていると元気になるということを、発言者１さんはおっしゃってますね。「日本

でいちばん大切にしたい会社」に選ばれ、中小企業庁長官賞を取られた。人が見に来ると、邪魔になるんじゃないかと思いますが、そうではなくて、むしろ見てもらえることで励みになる、張り合いになるとおっしゃっている。みんな、見に行きましょう。皆さん、「定年」は中小企業とか小企業にはないでしょう。大企業は辞めさせられるわけですよ。だから、中小企業や小企業の方が良いということですね。農業なんかも「定年」がないでしょう。本来の自然サイクルで、自分たちが仕事ができる年代は仕事ができるような企業とか、あるいはそういう産業がある所で生活するのが幸せではないかと思いますね。コーケン工業は本当に社会に貢献されていると思いました。

発言者２さん、埼玉県から来られた坊ちゃんは、小学校６年生で３位というのは、大したものですよね。ここはスポーツに良い所ですね。なぜか。食べ物が良いから、空気が良いから、人が良いからでしょう。そういう意味で、来て良かったとおっしゃっているわけですね。埼玉県は海がないですから。海がある所は良いものですよ。日本は島国ですから、海にあこがれるわけです。海産物などの食材がいっぱいあるわけですね。農産物でもおいしい果物があります。クラウンメロンは言うことはありません。しかし、彼女は商品にならない物をどう加工して、人に喜んでもらうかということを考えて、工夫して、ジャムづくりをしているんです。イギリスにマーマレードというジャムがあるんですが、向こうの人は、トーストにマーマレードを塗って紅茶と食べるわけです。彼女は、国際マーマレードジャム賞で銀賞をお取りになった。すごいでしょう。イギリスの本場でですよ、日本じゃないんですよ。たいしたものですよ。おそらく素材が良いからだと思うんですよ。目の前にある物をこつこつとやっていって、まさに世界的に注目されるような方になって、県や市からも、今いろんな依頼が来ているということです。加工すれば、うちの農産物は 339 品目あります。ですから日本一ですよ。２位は 158 品目しかない。ダントツなんです。食材王国なんです。海産物を入れると 439 品目。２位は 218 品目しかない。ダブルスコアで勝っているわけです。食材の王国なんです。その食材はほとんどが、クラウンメロンにしろ、三ヶ日のみかんにしろ、みんな農業芸術品で農芸品なんですね。それだけ、形とか色とかいろんなものにこだわるので、これは商品にならないと思ったら、もったいないけど捨てる。捨てるのはもったいないというわけですね。もったいないという気持ちで加工品にして、それで作っている人に喜ばれ、消費者にも喜ばれ、世界的にも評価されているということです。こういう「もったいない哲学」でやっていらっしゃることが、

私は、今日の発言者２さんの成功に結びついているんじゃないかと思います。これは子どもが見ていますからね。自ら工夫して、「こういうもったいない物を、お母さんはこうして加工品にしたよ」ということは、言わなくても見て知っていますからね。そういう青年に育っていくんじゃないでしょうかね。そういう意味で教育効果も大きいと思うんですよ。こういうふうにして、リサイクル、リユースとかリデュースとか、「ごみを出さない」、「リサイクルしていこう」、あるいは、「それを加工して違うものに変えていこう」ということですね。こういうのを磐田の文化にしていけば、あるいは、学校の中でもそういうことをおっしゃっているとよろしいんじゃないかと思います。ですから、彼女は、成功しただけではなくて、非常に重要な生き方を示されているんじゃないかと思います。大きな目標、リサイクル、リユース、ごみを出さないリデュース、こうした目標とコツコツ努力することが結びついているんじゃないかと思います。

【発言者３】　初めまして。私は磐田市合代島、旧豊岡村にあるコミュニティサロンカフェリリオを経営しております発言者３と申します。本日はよろしくお願いします。

私はコミュニティサロンカフェリリオというお店を経営しております。築 50 年以上の自宅を家族でリノベーション、改装して、平成 30 年８月 31 日、野菜の日にオープンしまして、オープンからちょうど１年３ヶ月ほどたちました。お店はまだ周知がされておらず、人との御縁による繋がりで、商工会や、磐田市などの協力もあり、ラジオ出演や新聞取材、補助金などを活用させていただきながら、認知度向上に励んでおります。私は、前職は介護の仕事をしており、ヘルパーをやっていたんですが、たまたま、近所のおばさん、まだ若かったんですが、その方が若年性アルツハイマーで私が働いていた所の施設に入所することになり、とてもショックに思いました。人は、外出、外に出る機会がないと、認知機能が格段に下がってしまって、ぼけてしまうという現実を目の当たりにしました。そういう人たちが少しでも減るようにと思ったことと、近所の高齢者の方たちも、一人暮らしの方が増え、一人ぼっちで食事をする機会も増えてきてしまって、外に出たりとか、誰かと話して笑ったりという機会が減っているので、高齢者の方にも気軽に利用していただける憩いの場と、人と人とを結ぶ場を作りたいと考えたことが当店の立ち上げのきっかけです。

また、豊岡村に唯一あったラーメン屋さんが高齢のために閉店することになってし

まって、そこの餃子の味を何とかして残していきたいという思いから、閉店間際にレシピをもらいに行って、何とかキッチンに入れてもらって習ったんですが、その味を残そうと思ったのも、きっかけの一つです。ただ、そこのレシピの中には化学調味料が入っていて、私の家族の体質にはちょっと合わなくて。特に主人なんですけど、化学調味料を摂ると、体に異変が起きるというか、喉が乾いてしまったりとか、お腹が張って、「おれ食べれないわ」と言われました。このことがきっかけで、そのレシピを改良しながら、私が自分の子どもに安心して食べさせられる内容で餃子を作っていこうと思いまして、無添加にこだわった、餃子を今作っているんです。ただ、普通に餃子を作っても、他との差別化がとても難しいので、なかなか売れません。そこで、他との差別化をするために、サイズを大きくして、12 センチという大きな皮で、直径 10 センチぐらいある餃子を作っています。これが機械で包むことができないサイズということで、今、私は、子どもたちが寝た後で、餃子を夜な夜な包んだりしていますが、生産が追いつかない状態にあります。何とか手作業でできないかということで、磐田市の紹介をいただいて、障害を持った方の就労支援事業所へ何度か依頼してみたんですが、まだ良い返事がいただけず、自分たちの力で頑張っています。

私自身、そのような思いでオープンしたんですが、中学生から２歳までの４人の子育て中の母親であるという御縁で、本当はお年寄りの方にも来ていただきたかったんですが、子育て中の若いママ世代が中心となっています。ママ世代のコミュニティーや活気も地域にはとても必要なものです。当店では小さな子どもたちにも安心して食べていただけるように、無添加や地産地消にこだわった食事を出したり、自家製のジャンボ餃子を開発したりしています。また、赤ちゃんが転んでもけがをしないように座敷の席に敷物を敷いたり、絵本を置いたり、子ども服の交換会を実施するなどといった新しい取組をしています。これらの取組により、ママのコミュニティーによる地域の新しい繋がりを築けていると感じています。また、現在は、当店の貸しスペースを、パン作り教室や学習塾、整体といった様々な企画やワークショップ、あとは、スタートアップとして利用していただけるように、場所の提供をしています。あとは、近所の方が作った手芸品などの販売の場所にも使っていただいて、地域のコミュニティの場所として利用していただけるように取り組んでいます。お店をやらなかったら出会うはずもないであろう人たちと出会って会話をすることで、その方から「やってみたい」とか、「私こんなことができるんだよ」というお話をいただいて、マッチング

を、この人とこの人を合わせたら、こんなことができるかもしれないと思い浮かんだ時に、人と人を紹介して御縁を繋げていったりしています。また、子どもがいるから、まだ小さいからお店ができないなど、やりたいことを諦めている人がかなり多くいるということを知ったので、そういう方たちを応援する意味で、活動の拠点となるように、場所を貸してサポートさせていただいています。将来的には、「子ども食堂」を切り口にして、高齢者一人一人が役割を担い活躍できる場所を作っていきたいと思っています。地域にコミュニティーの場所を作りたい、人と人を結ぶ場所を作りたい、これらの思いを持って、今後も頑張っていきたいと思っています。皆様もぜひカフェリリオにお越しいただいて、一緒に山間部の豊岡村の活性化をお願いしたいと思います。

私は、高齢者の活躍できる場所を提供していきたいと思っているんですけれども、磐田市では、だいぶ前に「ごんバス」というバスがなくなって、地域の足がなくなってしまったので、高齢者の買い物や通院、カフェに出かけるといったことが、実際は不便になっております。例えば、豊岡村にもデイサービスが何個かあるんですけれども、デイサービスの車を送迎以外の時間帯で活用してもらうことで、高齢者の外出を促す機会の創出や高齢者の危険運転防止に繋げられるのではないかと考えているので、県として、高齢者に対する地域の「足」の提供をぜひ検討していただけるとありがたいなと思います。お年寄りがやりがいや生きがいを持って元気に過ごせる地域を目指していきたいと思っています。よろしくお願いします。

【発言者４】　初めまして、発言者４と申します。出身はブラジルです。日本に来てから約 22 年になります。本日はよろしくお願いします。ちょっと緊張しているので、作った原稿を基に皆さんにお話ししたいと思います。

今から話す内容は、磐田市に住んでいる外国人に関する防災とその課題についてです。全く新しい言語を覚える大変さを良く知っている僕ですが、日本語が分からない外国人の役に立ちたいと思い、約２年前に磐田国際交流協会の日本語教室のボランティアをやり始めました。その活動の中で、外国人が防災に対して関心が薄いことを知りました。それがきっかけで、今年の４月、磐田多文化防災の会を作りました。月に１回、メンバーが集まって外国人のための防災を考える会を開いています。でも、私たちはまだまだ防災に関する知識や経験が不足しているので、もっと勉強しなければならないと感じ、磐田市社協主催の災害ボランティアコーディネーター養成講座に参

加しました。現時点で、磐田多文化防災の会として課題が２つあります。

１つ目は、防災訓練への外国人の参加者を増やすこと。そのために、彼らの防災に対する関心を高めないといけません。災害が起こった際、外国人に対する防災情報が少ない。磐田市が発信する防災情報はほとんど日本語で、日本語が分からない、読めない外国人には、情報があっても無いに等しい状況です。実際に先月、10 月 12 日に台風 19 号がこの地域を直撃した時、私達のメンバーが、日本語で発信されていた防災情報をポルトガル語に翻訳しました。あと、ブラジル以外の国籍の方にも分かるようなやさしい日本語を使って、ＳＮＳに発信しました。指定避難所が分からない方にも、個別で相談に乗りました。ちなみに、磐田市に住んでいる外国人の国籍の数は 50 以上ありますが、個人的に集めたいデータがあって、磐田国際交流協会の協力を得て、防災情報アンケートを作成しました。アンケートの内容をちょっと読み上げます。１問目、大雨、台風、地震の時の防災情報、若しくは、「いわたホッとライン」が発信するメールの内容が分かりますか。２問目、1 問目の回答が「いいえ」の方、分からない時、どうしていますか。３問目、台風の時、日本のテレビを見ますか。という内容のアンケートです。その作成したアンケートを、様々な国籍の方が集まる日本語教室で配って、外国人の方に記入していただきました。

あと、多言語化された防災情報を提供しているいくつかのスマートフォンのアプリがありまして、時間の都合で名前のみの紹介をさせていただきます。1 つ目は、「Safety Tips」というアプリがあります。このアプリは防災情報を多言語で提供しています。それから、日本語とポルトガル語のみになりますが、「いわたホッとライン」も防災情報を提供しています。今後、多言語化が予定されている「静岡県防災」アプリもありますが、まだ、外国人の中では十分に普及していない状況で、知らない人が多い。ちなみに、僕は先月知ったばかりです。防災情報が十分に届いて、避難所へ移動するという流れになります。でも、その避難所、避難生活で予想される課題があります。それが２つ目の課題です。国籍が違うと、文化とか風習が様々あると思います。そこで、予想される避難生活の問題は、１つ目、言葉の壁。２つ目、価値観。３つ目、宗教。最後、食べ物。もっとあると思うんですけど、今回はこの４つだけ出します。これらの課題にどう対応すれば良いか、現時点では分かりません。まず、外国人が防災訓練や宿泊訓練に参加することで、そこで生まれる課題が具体的になって、初めて対策がとれるのではないでしょうか。これが２つ目の課題になります。あと、私たちは、日

本人にも、やさしい日本語の大切さを知ってもらいたくて、今月の３日にアミューズ豊田で行われた「豊田ふれあいフェスタ」で、多文化防災ブースを出して、来庁者にやさしい日本語のクイズをやってもらいました。外国人とコミュニケーションを取る時に、簡単に伝わるやさしい日本語となかなか伝わらない日本語を日本人に実感してもらうことができました。約２００名の方がブースに来てくれました。ありがとうございます。

あと最後に、国籍や文化が違っても、お互いに助け合い、支え合う地域づくりを目指して、これからも頑張りたいと思います。どうも、ありがとうございました。

【川勝知事】　発言者３さんのお話には大変感心いたしました。どういうきっかけで、このコミュニティサロンを始められたか分かりました。元々ヘルパーですね。ですから、その精神が活きてますね。そのままに。若年性認知症は気がつかないうちに進行しているんですね。日本人の場合、もちろん高齢になると認知症になるケースが多いんですけども、認知症にならないように、なるべく、外に出たり、話をするということもあります。そこを出発点にして、始められたというわけですね。そこは良いんじゃないですか。餃子ってのはどこでも作れますけれども、同時に、皆、舌が肥えていますからね。それで、発言者３さんの舌はこういったことが良かったんですね。この餃子をなくしたくないということだったんですね。やってるうちに調味料の問題が出てきました。売れれば良いっていうんじゃなくて、御主人様、あるいは、子どもさんのことを考えて化学調味料を使わない、この考え方も良いんじゃないですか。ですから、基本的にヘルパーの考え方ですね。人のために何かできることを工夫するというのは。御自身に４人のお子様がいらっしゃるとおっしゃった。そうすると、子どもが安心して食べられるものを、化学調味料はやめましょうということになる。ママさんは、子どもの世話になるとつきっきりになるので、どうしても子ども、子どもで、結果的に社会から遮断されることがある。だから、ママさん同士のコミュニケーションが必要なわけですよね。そういう場を提供しようということで、非常に具体的ですよね。

将来、これに対して、市や県にできることがあるんじゃないかとおっしゃっている。特にですね、コミュニティーに参加しに行くのに「足」がない。「足」がないから、「足」をどうしろと言われる前に、デイサービスの車を使ったらどうかと言われている。デ

イサービスは毎日やっているんですから、それを使ったらどうかと。デイサービスの途中駅に、カフェリリオを作るということでしょうかね。デイサービスの担当の施設に御協力を願うにあたって、県と市にできることがあるのであれば、そういうふうにして、できることを少しずつ。今やっていることにちょっとした工夫を。新しくやるのはなかなか大変な場合がありますから。今回は、発言者３さんの提案を、取りあえず、実現できるかちょっとやってみたらどうかと思いますね。今のスペースで差し当たっては十分ですか。（＜発言者３＞はい。）そういうことでございます。１年とちょっとやっておられますが、需要があったというか、それを求める人がいたので、たくさんの人が来られているわけですね。そういうことで、人々の役に立とうという精神で営まれているカフェでございます。

発言者４さんは、今おいくつですか。33 歳ですか。10 歳ないしは 11 歳の頃にこちらに来られ、22 年間こちらにおられたわけですね。10 歳の時にブラジルから来られて、日本語ができないのは大変だったと思いますね。ですから、その御自身の大変さを、何とか、今の外国人の子ども達や外国人の方々に味わさせないように、自分ができるポルトガル語と日本語でお役に立ちたい、こうおっしゃってるわけです。これはすごく大事なことです。そして、発言者４さんは、いちばん大切なのは防災だとおっしゃっている。防災情報を翻訳するのはなかなか大変だ。突然ですが、ここでクイズです。「召し上がる」というのは、やさしい日本語でしょうか。丁寧な日本語ですけど、これは「食べる」と言うと、やさしい日本語です。「土足厳禁」は「靴を脱いでください」。それから、「高台に避難する」は「高い所へ逃げる」。こういうふうに言うだけで大分違う。おそらく、お父さん、お母さんが、小学生あるいは幼稚園の子どもに言って聞かせる時の言葉が「やさしい日本語」では。いろんな人がいらっしゃいますが、発言者４さんのような苦労された方をモデルにするべきじゃないでしょうか。

発言者４さんは、今、ボランティアで教えているということですが、もったいないですね。これは重要な社会貢献なので、やっぱりちゃんと対価が払われた方が、そういう組織にした方が良いと思います。ちなみに、発言者４さん、10 歳でこちらに来られたということですか。私は、浜松にあります文化芸術大学の学長をしていましたが、２人ブラジル人の大学生がいたんです。男の子と女の子です。この子たちは、特別枠で来たのではなく、試験を受けて入ったんです。「君たちはヒーローとヒロインだから、ブラジルの子ども達を励ましてあげてください」と言いました。つい２、３年前、卒

業式に招かれて行きました。そしたら、卒業生総代、全体の代表が、その女の子だったんです。袴姿で、答辞と言いますか、大学に対する感謝の言葉を述べられたんです。突然、途中で、「ここから、母国語で話すことをお許しください」とおっしゃったんです。そして、突然、外国語でしゃべられた。それはポルトガル語だったんですよ。私はすぐそばにいたんですが、彼女はハラハラと涙を流していました。そして、それを言い終えた後、また、日本語にかえって挨拶され、そして、答辞を学長にお渡しになって降壇されたんです。その時に何を言われたかというと、卒業式の会場にブラジル人のお母さんが来ておられたんです。答辞は最も格調の高い日本語なので、お母さんはブラジル人だから分からないだろうなと思い、だから、ポルトガル語で、「お母さん、自分は 10 歳で出稼ぎの子として、ここに来ました。だけど、お母さん、私はここまでやったのよ。お母さんのおかげ。ありがとう」と言ったんです。今、その子は、ポルトガル語と日本語が両方使える立派な会社で働いています。本当に立派な青年がいる。かつて、日本人が向こうに行った時に、ブラジルの人達に親切にされながら、ブラジル社会に溶け込んでいったのです。今、そのお返しをするべき時ですね。発言者４さんが、今日、ここで、こういう発言をされましたので、防災の件、それから、日本語をしっかり子どもたちを中心に教えていくという、これをですね、ボランティアに任せるのではなくて、しっかりと制度化していく必要がある。誰も、国籍や宗教や肌の色などで差別をしない。皆様の中には、ベジタリアンもいらっしゃるし、アレルギーの人もいらっしゃるでしょう。豚肉とかアルコールはだめだというのは、これはムスリムの人たちです。それは、ひとつの食習慣で、食材ごとにやっているというだけの話なんです。日本では、食材はいやと言うほどあります。それを、和食でもブラジル料理でも何料理にでもできるわけです。そういうふうな地域にしていこうではありませんか。差し当たって、いちばん多いのがブラジルの方ですが、まずは、そこを万全にし、このやり方をほかの所に応用していけば良いのではないでしょうか。外国の方に、やさしい日本語を、丁寧に、繰り返し繰り返し言っていくと、やがて、お互いに助け合うことができる時が来ると思います。どうも、発言者４さんありがとうございました。

【発言者５】　改めまして皆様こんにちは。ＮＰＯ法人キャリア教育研究所ドリームゲートの代表理事をしております、発言者５と申します。よろしくお願いいたします。

先ほど御紹介をいただきましたけれども、キャリア教育コーディネーターというものを、7 年ほど前から、誰に頼まれるわけでもなく、おせっかいおばさんとして始めました。あとは、その活動がきっかけで、磐田市の教育委員会からお声を掛けていただきまして、地域と学校を繋ぐコミュニティースクールディレクターというものを、ここ 5 年ほどやらせていただいております。そのお仕事の傍らにですね、磐田市の福祉課の中にあります就労準備支援センターと呼ばれる所で、生活に困ってしまった方がお仕事をするための応援をしております。一緒に動いてお仕事を探したり、そのお仕事が長く続けられるよう伴走支援員として支援をしております。すべて私がおせっかいおばさんとして行っているものでして、先ほど、皆様のお話や知事のお話を聞いて、4 人の皆さんのお話とすべて繋がっているなと思いました。キャリア教育コーディネーターと地域と学校を繋ぐコミュニティスクールディレクター、あとは、生活に困ってしまった方や引きこもりになってしまった若者の就労支援員をしております。

今いろいろ皆様のお話を聞いていて、とても繋がってるなと思っています。私は、12 年前にUターンをしてきました。もともとは佐久間で育ちまして、小学校の 5 年の時に、先ほどの発言者 4 さんと同じ 10 歳ぐらいの時に、旧豊田町に来ました。実は佐久間にいる時に、仲が良い子がどんどん転校してしまって、ちょっといじめられてしまったっていうことがありました。環境が変わると、とにかく世界が広がるんだなっていうことを小学生ながらに体験しました。また、この磐田の魅力を、高校時代までは理解できなくて、とにかく東京に憧れて、東京に行きました。マスコミの仕事がしたい、大好きな芸能事務所がある所に行ってみたいというミーハーな気持ちで、東京に行きました。テレビの仕事に就くまでに、いろいろな紆余曲折があり、本当にあきらめようかと思うこともたくさんあったんですけれども、その中で学んだことが今の活動に繋がっています。

7 年前に活動を始めました。自分自身が 30 年以上も前に夢を追いかけて上京し、テレビの仕事に就いた時に、表に見える仕事だけではなくて、裏の仕事、タイムキーパーとか、音響効果とか、アクリル装飾というお仕事を見て、例えばアクリル装飾なんていう仕事は、磐田にいたら知らないなと思ったんです。美術が好き、図画工作が好きという子どもさんも、お仕事を考えた時には、美術の先生か絵描きさんかぐらいしか多分、思いつかないと思うんです。音楽が好きと言っても、音楽の先生になるかピアノの先生になるか声楽家になるかぐらいしか思いつかないと思うんです。けれども、

音響効果という仕事があったり、他にも舞台の上ではいろんな仕事があるんです。けれども、知るきっかけがなかったら一生知らない仕事もあるんだなということを、その時に感じまして、これは磐田の子たちに伝えなければと思ったのが今から 20 何年も前の話です。12 年前にUターンした時に、どうにかして学校とそういったリアルな大人の世界を繋げることができないか、子どもとリアルな社会を繋げることができないかと思ったのがきっかけになります。

今日、この会場には、大変にお世話になってる方や知っている方がたくさんいらっしゃっているんですけれども、お世話になっている大好きな磐田の方たちの魅力とお仕事について知って欲しくて、お仕事体験わくわくワークを始めました。小学校の 4 年生から 6 年生まで、磐田市内の小学生の子たちみんなにチラシを配り、売る仕事、つくる仕事、支える仕事、豊かにする仕事というジャンルに分けて、仕事を体験させていただくイベントをやっています。最初に始めたのが、16 ヶ所の磐田市内の事業者さんです。中学生になって、職場体験等もやるんですけれども、小学生のうちに、小学校 4 年生、5 年生、6 年生の子たちにも体験をさせてあげたいなと思ったことが一つです。体験するだけであれば、キッザニアというのもあります。でも、体験したことを人に伝えるということで、より学びが強くなったらいいなと思いました。私自身が取材という仕事をしていた関係で、子どもたちが体験をした後に、そのお店の人に、「このお店の一番の売りは何ですか」とか、「いつからこのお店をやっていらっしゃるんですか」とか、「おじさんは何でこの仕事を始めたんですか」というような取材をしてもらいます。それぞれ 2 人から 3 人、違う学校の違う学年の子たちが一緒に行くんですけれども、チームで、取材をして、ポスターを作って発表するというところまでがプログラムになっています。多分皆さん分かると思うんですけれど、社会ではコミュニケーション能力が求められます。話す力だけではなくて、聞く力とか、相づち、例えばうなずくとか、反応するということも大事なコミュニケーション能力かなと思っています。今、子どもたちが、地域の大人とか、知らない大人と接する機会はなかなかありません。先ほど、カフェリリオの方もおっしゃっていましたけれども、コミュニティの場所を作っていかないと、なかなかそういった力を発揮する場所、力をつける場所がないと思っています。

ところで、キャリア教育という言葉をお聞きになったことありますでしょうか。キャリア教育とは、一人一人の社会的、職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態

度を育てることを通してキャリア発達を促す教育というふうに、文科省では定義されています。社会的、職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を「育てる」ではなくて、「育てることを通してキャリア発達を促す」教育というふうになっています。「キャリア発達」とは、いろいろな役割などの積み重ねや連なりのことだそうです。「キャリア」という言葉自体には、「轍」という意味がありまして、後ろにできるものだそうです。どうしてもキャリア教育というと、仕事ができる人になってほしいというイメージがありますし、私も最初、職業教育かなと思って、いろんな仕事を知ってほしいという思いで始めたんです。活動を続ける中で、エピソードとしてこういうことがありました。必ずお掃除を体験場所の中でさせてくださいとお話をしているんですけれども、「雑巾を絞ってください」と言った時に、「絞り方がうまく分からない」とか、「掃除機をかけてください」と言った時に、「やったことない」と言う子が結構いました。私が、「お手伝いとかしないの」と言うと、「うちはルンバだから」と言われたことがあるんです。ああなるほどと思いました。もう 1 つ大きな活動として、夏休みの学童の待機児のための「寺子屋」という、夏休みの活動をしているんですけれども、そこでも、子どもたちはお水を出したら出しっ放しなんですね。多分自動で止まると思っているんですよ。今はトイレに入っても便座の蓋が勝手に上がってくれて、手を出せば水が出てという便利な世の中になっています。そうすると、子どもたちが手を使って蛇口を閉めるとか、雑巾を絞るというような体を使う手仕事というものをなかなかやる機会がないと思っていまして、そういった場を作っていけたらいいなと思って活動をしています。

日本の生徒たちは学力はとても高いんですね。PISA という国際的な学力調査がありまして、日本の生徒たちは 2 位だったり 1 位だったり。理科数学、あと読解力という部分で、とても学力は高いんですけれども、「その学びが楽しいと思うか」とか、「関心が有るか」とか、「将来に繋がっていると思うか」というような態度の部分の質問になりますと、最下位から 2 番目なんです。それを見て、何のために学ぶのかを伝えてあげられるような教育ができたらいいなと思って、この活動をしています。

「何のために学ぶのか」ですが、自分の場合は、アナウンサーを目指して東京に行きましたので、例えば、人の話を聞く時や取材をする時に、いろいろなことを知っていなかったら話が聞けません。いろいろなことが分かっていないと、人に伝えることもできません。それでは、何でアナウンサーになるのに英語ができた方が良いのでし

ょうか。それは、海外の方が来た時に言語が通じるからです。先ほどの発言者４さんは、ポルトガル語でお話ができます。もし、ポルトガル語でしかお話ができなかったなら、私はここでコミュニケーションを取ることができませんが、もし、ポルトガル語ができれば、彼の思いを伝えることができる。だから、勉強しないといけないんだというふうに、私の夢に関しては分かりやすいと思っていました。子どもたちに「何のために学ぶの」と聞くと、「将来困らないため」とか「稼ぐため」とか「お金のため」みたいなことを言うんですけど、「それじゃ、お金ってどこから来るの」という話をすることがよくあります。とても美味しいハンバーグ屋さんに行列ができるのは、みんな「美味しいからありがとう」という気持ちでお金を払っていると思うんですね。高い金額でも、みんなディズニーランドに行くのは、あの夢の世界を体験するためだと思うんです。ですから、ありがとうという気持ちがお金になっていくんじゃないかなと思います。ニーズを察知して、そのニーズを人に返してあげることができたらいいんじゃないかなと思っています。何のために学ぶのかということ、あと、学校で行われていることを、リアルな社会とうまく繋げて、伝えられるようになっていきたいなと思っています。例えば、あと 2 週間でテストという時には、計画的に勉強しますよね。もし、プレゼンテーションがあるなら、その準備をしますよね。デートがあるなら、そのために、ちょっと自分を綺麗にしようかなというふうになるじゃないですか。それも一つのキャリア教育だと思っています。健康もそうです。体力もそうです。知力もそうです。「信頼貯金」をつけていくことじゃないかというふうに、子どもたちに伝えています。提出物をちゃんと出す、返事をちゃんとする、挨拶をちゃんとする、そういったことが、キャリア教育の土台になっているのではないかなと思っています。要は、信頼貯金がちゃんと積み上がっていけば、幸せな人生が送れるのではないかなと思っています。

私が考えるキャリア教育によって、幸せな人になってほしいと思っています。先ほどコーケン工業の発言者１さんから、元気で笑顔で働けることが幸せなことというお話を聞いた時に、それは本当に幸せなことだなと思いました。誰かに見られるとか、誰かが来るとか、誰かに会うということはとても幸せなことなんじゃないかなと思いました。先ほどの「さじかげん」の発言者２さんのお話でも、目の前のことを一生懸命やっていたら扉が開いたとおっしゃっていましたけれども、ちょっと難しい言葉ですが、計画的偶発性理論っていうのがございまして、目の前ことを一生懸命やってい

ると、扉が開いていくそうです。一生懸命頑張っていると、やっぱり見ていてくれる人がいて、次に進めるというものであって、キャリアプランを立ててそれに向かって、これになりたいからこの勉強するというのは、ちょっと違うんじゃないかなと実は思っています。

縁がありまして、引きこもりの若者の方とか、生活に困ってしまった方の就労支援もしています。何で困ってしまうんだろうなっていうことを紐解いていくと、健康の貯金がうまくできなかったり、人との繋がりの貯金がうまくできなかったり、信頼貯金をうまく積み上げることができなかったり、そういったところが、ちょっとずつできなくなって、困ったことになってしまったんじゃないかなと思っています。70 代の方、60 代の方の就労支援、外国人の方の就労支援が、この 7 月以降とても増えています。高齢化して引きこもっている方がとても増えていると聞いていますが、それは実感しています。大人になってからの方が長いじゃないですか。子どもの時代よりも。子どもの時にちゃんと勉強し、友達と仲良くしたり、人に優しくしておくと、後から返ってくるんじゃないかなと思っています。引きこもってしまう方に、「何が好きなの」とか、「何が趣味なの」とか聞いても、「そんなことを考えたことがないから分からない」と言われることもあります。それは大人の私たちの責任かなと思うことが多々あります。「『サッカーをやれ』とか、『野球かサッカーのどちらかをやれ』みたいに、人に言われて決められるという形で何々をやってきました。だから、『今何かをやれ』と言われたらやれますけれども、自分では何をしたらいいか分かりません」というような子が、本当に多いなと思っています。子どもたちには、「私は何が好きなんだろうな」とか、「私は何が得意なんだろうな」ということを考えながら、自分で探して、自主選択して、自分で決めるということを、自分で決めてそれに責任を持つということを、やらせてあげられたらいいなと思っています。失敗を恐れる子ども、失敗を恐れる若者がとても多いですが、失敗は必ずしてしまうもので、失敗をして立ち上がる時に学ぶ力をつけられたらいいなと思って活動しています。とにかく、大人になってからの方が時間が長いので、その時間を幸せに過ごすことがうまくできるように、活動をこれからも続けていきたいと思います。

取りとめもなく長くなりました。今、コミュニティスクール、学校と地域を繋ぐということを、微力ながらやらせていただいています。しかし、コミュニティスクール推進の予算がどんどんなくなっているという噂を耳にしております。地域と学校を繋

ぐということで、子どもたちに和食の授業や職業教育をさせていただいたりし、子どもたちがどんどんと変わっていくのを見ていて、とても幸せな気持ちになっているんですけれども、「予算がもしかして…」という話が聞こえてきて、どうしたらいいんだろうと悩みの種になっております。是非とも、来年も支えていただければ嬉しいです。ありがとうございました。

【発言者６】　皆さん、こんにちは。僕は、磐田スポーツ部活のラグビー部指導者ということで、本日、こちらの方にお招きいただきまして、ありがとうございます。

私はヤマハ発動機で、磐田部活の他に、普及と、ラグビースクールをやっています。その中で、普及の方は、各小学校、中学校に行って、タグラグビーやラグビー体験をやり、あと、各幼稚園、保育園に行って、ラグビー体験をやっています。なぜ、これをやっているかというと、スポーツを通じて、我々はラグビーをやっているので、ラグビーを一つのツールとして、各小中学校、幼稚園、保育園の子どもたちにスポーツの楽しさを知ってもらおうということで、地域の活性化も含めてですけれども、そういった視点で、訪問をさせていただいております。今、発言者５さんのお話にあったキャリア教育ですけれども、僕らも今、磐田市の方とも連携して、キャリア教育をやっています。今一緒にやっているスタッフの者で、小学校の時にいじめられていたという子もいたんです。そういった子もラグビーに出会って、自信がついて、今までは立派な青年として、会社で仕事をして、一緒に活動しているんです。そういった点での「キャリア教育」を僕らもやっていますので、何かあれば是非言ってください。

ラグビースクールと磐田スポーツ部活はちょっと繋がってくるんです。県と磐田市が協力して、磐田スポーツ部活のラグビー部ができました。ラグビースクールで僕らはラグビーを教えているんですけども、ラグビーの上手い、下手はともかく、失敗してもいいから本気で取り組むということをラグビースクールの子どもたちに言っています。磐田スポーツ部活では、磐田市在住の子で、ラグビーをやりたいけれど、市の中学校にラグビー部がないという子どもたちを市でまとめてくださって、皆が集まってラグビー部としてラグビーをするという活動をしています。その中で、僕らは上手い、下手よりも気持ちの面や、一生懸命やるということを教えています。

この前ワールドカップがありましたけれども、皆さん、テレビでワールドカップラグビーを見られた方はどのくらいいらっしゃいますか。見られた方がほとんどですよ

ね。普及活動で、各小中学校、幼稚園、保育園に行きますけれど、ワールドカップ前は、テレビでラグビーを見たことのある子は 1 人、2 人だったんですよ。それが今ではもうほぼ全員が見ています。すごいなと思いました。ワールドカップでの日本代表の活躍もあり、あとはテレビの影響もすごくあるなと感じました。やっぱり日本代表がすごく頑張ってくれました。僕らはラグビーを子どもたちに教えていますが、皆さん見て分かるとおり、15 人があれだけ体を張って、ベンチにいる、若しくはそれにすら選ばれなかった人たちの分まで体を張ってやるというのがラグビーです。そういった気持ちの面を子どもたちに教えられたらいいなと思っています。そのワールドカップで、準決勝で負けて 3 位になったニュージーランド、オールブラックスですね、そこの監督がいい言葉を残しています。「良い人間が良いチームを作る、良い組織を作る」というような言葉です。僕もその言葉すごく好きで、子どもたちに教えています。ごみが落ちていてもそれをスルーするとか、挨拶をしない、片付けをしない、小さなことですけれども、そういうことに気付いて改めるということが、ラグビーにも活きてくるし、私生活でも学校生活でも活きてくると。

今、ヤマハの中にも、ラグビーOB がたくさんいます。ラグビーは 1 チーム 15 人で、スポーツの中で一番多いと言われていますけれど、コミュニケーションを取らないといけないですし、ぶつからないといけないということで、ガッツが必要です。練習もとても過酷です。「でっかくなれ、でっかくなれ」と言われながら、「足が速くなれ」とか、「グラウンドをたくさん走れ」とか、矛盾したことばかり言われるんですけれど、そういった中で頑張った成果で、ラグビーを覚えた後も、会社の中でサラリーマンとして活躍されて、結構上司になっている人が多いですね。偉い位置に行って、国内外ですごく活躍されてる方が多くて、ラグビーの持ってる精神が、そういった方々を生んだんじゃないかなと思っています。ですから、僕らとしても、ラグビーの上手い、下手よりも、本気で取り組む姿勢になってほしい、良い人間、小さいことに気付く人間になってほしい、あるいは、感謝を忘れない気持ちになってほしいということで、トータルとしてラグビーを教えています。

今、僕らのラグビースクールでは、年長から中学生まで見ています。実は、この磐田市に高校のラグビー部がないんですよ。皆さん御存知だと思いますが、浜工とか、静岡翔洋高校とか、静岡聖光学院とかいろいろありますが。ところで、今、中学生の方が結構レベルが高くなってきました。磐田スポーツ部活ができて、練習は、月曜日

と金曜日がプラスされて、週に 4 回やっています。そのおかげで、みんなすごくレベルアップし、上手になりました。関西の大会があるんですが、今、ベスト 4 までいきました。ベスト 3 まで入ると全国大会なんですよ。あとちょっとなんですけれど。磐田スポーツ部活ができる前までは、中学校一学年 7 人から 9 人だったんですが、今は、ほぼ 20 人います。合計でほぼ 60 人います。非常に御協力いただいて、こういった、みんなにラグビーをしてもらえる場を提供していただいて、本当に感謝しています。高校で、磐田市に残ってラグビーをやりたいという子も中にはいるんですが、なかなか高校でできない。１つは指導者の問題があります。あと、ラグビーをやりたいと発信する子もなかなかいないのかもしれない。ラグビー部があって、受け皿がもともとあれば、もしかしたら、やるという子もいるかもしれないんですが、磐田市の高校では、現状ではラグビー部がない状況で、結果的に皆、浜工や翔洋、それに、花園の全国大会に出場したいということで、県外に出ちゃっているんです。去年、半分が県外に行きました。上手い子たちが静岡県内に残らず県外に行ってしまって、ちょっと寂しいですけど、彼らが一生懸命頑張ってくれるようなら、それはそれで良いかなと考えています。またテレビで見れたら良いなと思っているんですけれども。でも、そうは言っても、彼らが磐田市で輝いている姿を見たいなと思って、県の教育委員会の方や磐田市のスポーツ振興課の方といろいろと相談をしているんですが、なかなかうまくいかないんです。ラグビー経験者の方を先生として採用してもらえたらという話もしました。なかなか難しい面もあるとは思いますけれども。ヤマハとしても協力できるところは協力をしていきたいんですが、指導者をこちらから派遣するというのはちょっと難しい状況なんです。今日は知事が来ていらっしゃるんで、その辺を何とかちょっと練っていただけたらなと思っているんですけども。

我々としても、高校で、花園で活躍してる姿を見て、また、大学へ行って、ヤマハがこの磐田にあるので、トップリーガーとして帰って来てくれたらいいなと思っています。トップリーガーでなくても、先生として帰って来るのでもいいと思っています。もう１回コーチとしてやってみたいなという気持ちで、戻って来てくれたらいいなと思っています。現状としては、課題は、高校での指導者の問題や、高校の部活が磐田市にはないというところで、この辺について、今すぐには答えは出ないとは思いますけれども、アドバイスをいただけたらなと思います。ありがとうございました。

【川勝知事】　発言者５さんと今の発言者６さんは指導者ですね。ですから、授業を聞いていたという感じがします。ですから、学校の先生だけが先生ではないということではないかと思うんですよ。それで、コミュニティスクールというふうに言われましたけれども、社会総がかり、地域ぐるみで子どもを育てるという決意をすることが重要ですね。小学校、中学校は義務教育で、文部科学省が極めて厳しく学習指導要綱というのを作っておりまして、それに則ってやらなくちゃいけないので、だんだん忙しくなって、少子化にも関わらず、先生が忙しくなっているという現状があります。その先生方を楽にしてあげるために、また先生方が、なるべく子どもに接する時間が多くなるように、みんなで助け合うと。

例えば、発言者５さんの場合は、若い時に東京に憧れて行かれて、そして、10 数年前に帰って来られたということなんですが、これがまた良いんですよ。行くなって言うんじゃなくて、行けば良いと。お父さん、お母さんの所から、一度、一人立ちをして、自分一人でやってみたいというのは、自分たちの若い時を省みられても、分かるんじゃないですか。ただ、いろんな事情で、お父さんやお母さんと離れない人もいるかもしれませんけど、それが許される状況であれば、東京に行ってみたい、あるいは違う所に行ってみたいというのが自然だと思いますね。足を引っ張る必要はない。

だけど、人生の転機があると思います。皆さんそれぞれが顔や個性が違いますけれど、大体 100 年ぐらいで別れなくちゃいけない。そういう生物的な人生の長さがあるでしょう。そうすると、30 ぐらいになったら、「結婚」という、本当に深刻な、自分の人生における決断をしなくちゃいけない。結婚するとなると、相手の、例えば、男だと女の方の御両親に会いに行かなくちゃいけません。向こうの女性も、両親に御紹介しなくちゃいけないというふうになると、両親のことを考えるんじゃないですか。父と母、ああそうだ、ということになりますよね。それから二人で住むとなると、今までのようにアパートを借りるんじゃなくて、二人で生活しなくちゃいけなくなると、二人とも働いて、借金を返しながら、ローンを組んで、マンションを取りあえず手に入れるかと。そうすると、20 年ローンだと、20 年間そこから出られなくなるけれど、それで良いかどうか。こういうふうに、個人差がありますけれど、大体 20 代の後半から 30 代前半までくらいの 30 前後にですね、転機がくると思いますね。ちょうどその頃じゃないですか、お戻りになったの。30 代の頃に、ふと、ふるさとのこと、あるいは友達のこと、御両親のこと、いろいろと思うところがあって、帰ってきた時に仕事

があるかどうかってことです。一生同じ仕事につく終身雇用というものが今はだんだん崩れてきまして、仕事を離れる若者が出てきています。もし、東京で、ビルの森の中で生活するのが嫌だと、磐田の豊かな自然の中に戻って来たいというなら、その時に、こういう仕事がありますよと情報を提供します。実は静岡県だけで 10 万以上の事業所があります。一次産業、二次産業、三次産業、すべてあるんです。素晴らしい産業構造を持っているんですよ。それを知らないまま東京で仕事している人がいる。なので、それを知らせようということです。「30 歳になったら静岡県！」と。去年あたり、千人以上、静岡に来た人がいますよ。何と、その 82%が 20 代から 40 代です。それまでは、大体、暖かいから、穏やかだから、定年退職して終の棲家は静岡というのが、今、若い人が帰って来ているのは、我々のこの政策が効いてるからだと思っているわけです。

発言者 5 さんの場合は、アナウンサーの仕事をされ、したがって、いろんな世界を見てこられて、インタビューもされて、それを子どもたちに返したいと。その返し方の中に、お金でない大切なことを言われました。例えば、信頼というものは、貯金されるものだと。「信頼の貯金」というのはすごい言葉ですよね。例えば、虐待された子とかを見ていると、愛情が十分にもらえていないと思います。愛情というものは貯金されるんじゃないでしょうか。かわいがる愛情量は、ずっと心の中に蓄積されています。この愛情量は、ある時に人に優しくなる形で返されてくると思います。計れませんけれども、愛情というものは蓄積される。愛情が十分にもらえていない人たちが何に飢えているかというと、たった 1 つ。愛情です。愛情が欠落しているとなれば、それを社会全体で差し上げればいい。そういうことを教えることが大事です。君は愛されているんだと。一人じゃないんですよと言うことから始まって、一つ一つ噛み砕いて教えていくことが大事であると同時に、その子どもを愛していくことが大事だと、それをみんなでやるべきだと思いますね。そういったことのいろんな経験について発言者 5 さんがお話ししてくださいました。

発言者 6 さんは、ラグビーの先生ですから、選手であり先生ですから、こういう人がいるのは磐田の財産だと思いますよ。オールブラックスの話をされましたでしょう。オールブラックスはニュージーランドでしょう。ニュージーランドの GDP はどれくらいですか。つまり経済の量ですね。静岡と一緒ですよ。16 兆円、17 兆円くらいです。向こうの人口は 440 万です。うちは 370 万でしょう。ということは、一人当たりの所

得はうちの方が高い。今は、山梨県も「富士の国」と言い始めていますが、80 万人くらいいらっしゃるから、合わせると 450、60 万人くらいになって、GDP も山梨県を含めると、ニュージーランドを抜いているわけです。ニュージーランドの場合は、外国に行くには、パスポートが要ります。通貨も違います。だけどこちらは、お隣の三河に行くにしても、北の信濃に行くにしても、あるいは山梨県の甲斐の国に行くにしても、神奈川県の相模の国に行くにしても、通貨は一緒だし、言語も一緒だし、パスポートは要らないし、圧倒的に恵まれているんです。なぜニュージーランドにオールブラックスがあるのに、静岡県にオールブラックスがないのかということじゃないでしょうか。だから、できるという話です。どうしたら良いか。まずは高校にラグビーの部活がないという問題です。小学校の高学年から中学生ぐらいのところで、相当伸びてきたということです。ベスト 4 まで来ていると。それを吸収して、静岡県、ふじのくに全体で、「オールふじのくに」で、それでニュージーランドとやればいいんじゃないかと。それくらい、可能性は客観的にはあるので、あとはどう仕組みを作っていくかということであります。

そのためには、いろんな選択肢を子どもたちに与える必要があります。今は、学力テストというのがございます。この英語、数学とか理科とか社会、そういうものを、テストするだけが大切だということはないでしょう。仲村菫ちゃんは幾つでプロになりましたか。10 歳。10 歳で囲碁のプロじゃありませんか。だから、彼女は囲碁の世界で生きていくでしょう。藤井聡太君はどうでしょうか。14 歳で 50 勝を取って、今、もう 7 段になっているでしょう。だから、彼は将棋の道で生きていくわけです。中学生の時くらいに生きる道を決めているわけですね。学校の算数ができるとか、国語ができるとかは関係ないですよ。生きるべき道は、富士山に登る道がいくつもあるように、いくつもある。そのいくつもの道は誰が提供しているかというと、我々全員です。ですから、それぞれ皆、学ぶに値する生き方をしているはずです。人の親として背中を見られているわけです。あるいは、先輩として後進が見ているわけです。それをどのように還元していくかということで、差し当たって、小学生、中学生、高校生くらいの年齢、10 歳代の前半くらいは、非常に多感で、そして意思決定もだんだんできるようになってくる時です。その時に、いろいろな形で彼らを刺激して、自分はこれをやりたいと思わせる。ただし、それで自立できるかどうか分かりません。自分はラグビーに憧れた、やりたいと一生懸命やったけれども、どうしても上には上があります

から、自立ができない、あるいは挫折をする。挫折、つまり失敗をした時に、発言者５さんも話されていましたけれども、何かを学ぶということが人間を成長させるわけです。同時に、失敗した者を蹴落とさないということ、許すということです。つまり再チャレンジ、再々チャレンジを許すということです。いつくらいまででしょうか。30 代の前半くらいまででしょうか。30 にして立つという言葉が昔あって、15 にして学に志し、30 にして立つ、40 惑わず、不惑ですね、50 天命を知るという言葉もあります。40 になるともう迷ってはいけないということであります。ですから、四捨五入して 40 になる、つまり 35 以上になると自己責任です。あとは、あなたの責任ということです。それまでは、いろんな試行錯誤をして失敗しても、それ当たり前だと思います。100 年の時代ですから。そういうつもりで、若い青年、少年少女たちにですね、いろんな希望、夢、道を指し示し、そしてその冒険を寛容の心を持って許す、広い心を持って認める。旅に出なさいと。修行していらっしゃいと。修行時代として 30 代の前半くらいまでを認めると。そういう磐田になってほしいと思いますね。ここへはいつでも帰って来れますよと。農業もある、スポーツもある、ものづくりもある。そして、素晴らしい市民がいる。そういう形でＩターン、Ｕターン、Ｊターンして来る人たちがいらっしゃる。まさに東海道のど真ん中で、往来がある所ですから、いつでもいらっしゃいと。来るものは拒まず、助力は惜しまず、見返りは求めないと、こういう精神で、ここが出発点になるだろうと。差し当たってラグビーですが、これだけ熱狂を生んだ、「シズオカ・ショック」ですから。全世界にこの名前、静岡の名前が、富士山と同じくらいとまでは言えないけれども、轟き渡ったわけです。それはこの地域です。ですから、この遠州から、ラグビーの聖地づくりをしていきたいと思っております。素晴らしい先生が磐田に来ておられます。そうした所と、この今旬のスポーツ、これを結び付けていきたい。

何かやっていくと、ある時、自分が何も知らないことに気付く時が来るんですよ。その時が、知識を思いっきり吸収できる、実は大事な時なんですよ。何も「15 歳になったら高校」ではなくて、ある時に、どうしても栄養について知りたい、ある時にどうしても健康医学について知りたい、ある時にどうしてもマネジメントについて知りたい、ある時にどうしてもコンピューターについては分かっていないといけないとかですね。ある時にそういう時が来ます。その時はチャンスで、その時に学べる場所をちゃんと提供できる人材バンクのようなものを作っておくといいですね。この件につ

いては、例えば、ラグビーについては、こういう人たちがいるから来てもらえばいいとか。あと、とにかく小学校、中学校をもっと社会にオープンにする。ですから、発言者５さんは誤解されていると思いますけれど、私どもは、コミュニティスクールの方向に大きく舵を切っています。ふじのくにの表玄関の静岡県と奥座敷の山梨県、一体になって 450 万人です。ふじのくにの自立をするためには、まずは人づくり、教育の自立が必要だと思います。教育の自立から始まると思います。子どもたちを自分たちで責任をもって教えることができると、あるいは教える使命があると思っていただいたら勝ちですね。私は、今、この静岡県民 370 万だけで、ここにいる子どもたちをどう教えていくかという、そういう事業に迫られたわけです。ここにいらっしゃる人達全員で、どのように小学生、中学生、15 歳くらいまでを教育していくか。我々は、相談して、カリキュラムを組んで、教えることができる力を持っていますよ。日本の国は、今、外国からたくさんの方が来られて、憧れられています。ですから、外国人にも教える力を持つためには、発言者４さんのような外国人とコミュニケーションのできる方も受け入れる。来る者は拒まない、差別はしない。ラグビーと一緒です。いろんな肌の人、いろんな食習慣の人たちがいらっしゃる。「One for All, All for One」でやっているじゃないですか。その精神を、せっかくですから、この遠州の地から発信していきたいと僕は思うんです。それを、私は発言者６さんにお約束したい。お約束したいというか、県の方針としたい。今、文化・観光部という部があるんですよ。文化・観光部の下に、スポーツ局という局がありまして、そのスポーツ局が今回のワールドカップやオリンピック、パラリンピックを全部背負って仕事をしているわけです。「文化」の下にあるのを、「文化」の上に持って来まして、「スポーツ・文化観光部」というふうにしようかと思っています。文化・観光部というのはちょっと堅苦しいので、スポーツを上に置いてね。その方が何となく元気が出そうで。一番良いのは、良い人を作ることです。そうすると良い組織、良いチームができる。また、良いチーム、良い組織は、良い人を作るはずです。良い人を作るということが本当に最高の目的ではないでしょうか。さすが、ラガーマンだと思います。よろしくお願いします。

【傍聴者１】　傍聴者１と申します。県の組織について、見解を聞きたいんですけれども。経済産業部という部があって、そこに農芸振興課があります。一方で、くらし・環境部という部があります。経済産業部の農芸振興課の方では、花の生産、農家の振

興がメインだと思うんですが、「花の都しずおか」の推進をやっている。くらし・環境部の方は、「花と緑の庭園県」運動を始めましたね。「花の都しずおか」の方は、全体の花の振興ということでやっているんです。生産から言えば、花の生産が、静岡県は全国の 3 位から 5 位に下がったということで、我々現場では、いろんな花をたくさん育てたりしていますが、その中で、この二つの運動をなんで別々の組織でやっているのかということが、ちょっと疑問に思えました。二つ別々にやっているんですけど、現場では交錯しちゃっているんですよ。この二つの運動を別々にやっているのはどういうことなのかお聞きしたいと思います。

【西部地域局長】　ありがとうございました。知事が私が答えて良いということでしたので、私がお答えさせていただきます。経済産業部の農芸振興課は、基本的には生産振興を担当するので、農業振興を中心とした施策を実施しております。一方で、くらし・環境部は、生活環境を豊かにしようということで、生活環境の立場から仕事をしています。ただ、生産振興の部分からのアプローチと、生活環境の部分からのアプローチがどうしてもオーバーラップしてしまうのは否めないということで、県でも、以前から組織改正の度に、そういった点について議論をしてきたところであります。今の二つの運動そのものが重複しているのに整理し切れていないという点については、持ち帰らせていただきまして、整理を進めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、申し訳ありません。時間が大分経過してしまいました。会場の皆様、誠にありがとうございました。お時間が参りましたので、これをもちまして、知事広聴「平太さんと語ろう」を終了いたします。発言者の皆様、本日はどうもありがとうございました。